『貫之集』西本願寺本と資経本の共通祖本について

北井佑実子

はじめに

現在、『貫之集』第一類本は、次のごとく四系統に大別される。

第一類本　①歌仙家集本（正保四年刊　九巻八八九首）系
　陽明文庫本（近・サ・68　九巻八九二首）
　東海大学桃園文庫本（九巻八九二首）
　村雲切（巻五の一部と巻八及び諸家蔵七十七葉二五〇首）
②素寂本（巻一～巻四の五四五首）系
③西本願寺本（一〇巻七二七首）系
④資経本（巻六巻七の三一六首）系
　承空本（七巻九二二首）
　御所本（書陵部蔵510・12　七巻九三〇首）

『貫之集』第一類本は、同一祖本より派生したと考えられ、主に巻の仕立て方の相違により、①九巻仕立ての歌仙家集本系、②前半部（巻一～巻四）のみが伝わる素寂本系、③十巻仕立ての西本願寺本系、④巻六・巻七のみが伝わる資経本系[1]に分かれている。

本稿で取り上げる西本願寺本と資経本が、共通の祖本を有するということを確認すると同時に、まず、『貫之集』における巻の仕立て方の相違について見ていきたい。次の表は、歌仙家集本を基準にして、素寂本・西本願寺本・資経本・承空本の歌序を並べかえたものである[2]。

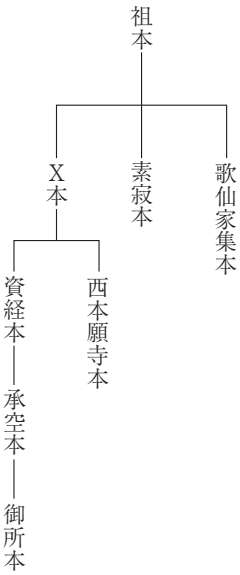
	歌仙家集本（九）	素寂本（一～四）	西本願寺本（十）	資経本	承空本（七）
屏風歌	巻一 1～55 56～96	巻一 1～55 56～96	巻一 1～55 巻二 56～96		巻一 1～56 巻二 57～101
屏風歌	巻二 97～104 105～160 161～217	巻二 97～104 105～160 161～217	巻二 97～104 巻四 257～312 巻五 313～369		巻二 102～109 巻四 167～223 巻五 224～280
屏風歌	巻三 218～274 275～365	巻三 218～274 275～374	巻三 105～159 160～256		巻三 110～162 巻五 281～380
屏風歌	巻四 366～532	巻四 375～545	ナシ		巻五 381～552

前半部屏風歌（巻一～巻四）について、歌仙家集本・素寂本においては、屏風歌がほぼ年代順（延喜五年～天慶八年）に配列されている。それに対して西本願寺本・承空本は、屏風歌の配列が年代順ではなく共通の乱れを有する。右表の歌仙家集本巻二（屏風歌）を例に挙げて説明すると、歌仙家集本・素寂本では巻二に位置し年代順に配列されている屏風歌が、西本願寺本・承空本では、巻二・巻四・巻五に散布され、屏風歌は年代順に配列されていないという次第である。

次に、歌序についても見ていく。歌仙家集本の巻一56番歌の位置で、西本願寺本と承空本は巻二が始まる。つまり、西本願寺本と承空本は、同じ位置で巻の相違が生じ、巻の仕立て方を等しくしていると言えよう。また、歌仙家集本巻二105番歌の位置で、西本願寺本は巻四の257番歌へ移動、承空本も同じ位置で、巻四の167番歌へ移動している。さらに、歌仙家集本巻二161番歌の位置で、西本願寺本・承空本は巻五が始まる。西本願寺本と承空本は、巻の仕立て方を等しくし、全く同じ位置で歌序の相違が生じているのである。従って、両者は共通の祖本を有するという結論が導き出されるのではなかろうか。さらに、西本願寺本は、歌仙家集本に相当する巻四の歌166首をすべて欠いている。しかし、西本願寺本と共通の祖本を有する承空本は、西本願寺本が欠いているこの166首を有している。

	歌仙家集本（九）	素寂本	西本願寺本（十）	資経本（六・七）	承空本（七）
恋	巻五 533～676		巻六 370～516	巻七 172～313	巻七 778～919
賀	巻六 677～700		巻七 522～545		巻五 578～601
別	巻七 701～742		巻八 549～594	巻六 1～42	巻六 607～648
哀傷	巻八 743～769		巻九 595～620	巻六 43～69	巻六 649～675
雑	巻九 770～788 789～795 796～877 878～889		巻十 621～634 711～717 635～709 710～727	巻七 74～87 88～171	巻七 680～693 巻五 553～559 巻七 694～777 巻五 560～577

後半部分（巻五～巻九）についても見ていく。歌仙家集本巻九789番歌の位置で、西本願寺本は巻十634番歌から711番歌へと歌序が移動している。承空本も同じ位置で、巻七の693番歌から巻五の553番歌へと歌序が移動。後半部分に関しても、西本願寺本と承空本は同じ位置で歌序の相違が生じている。[3] なお、恋部について、歌仙家集本・西本願寺本では、前半部屏風歌の次に位置しているが、資経本・承空本では、巻末の巻七に位置していることは注意を要する。甚だ大まかな括りではあるが、以上見てきたごとく、『貫之集』第一類本の関係を系統図で示すと、次のごとくとなろう。[4]



『貫之集』第一類本は、同一祖本より派生しながら、巻の仕立て方・歌序の相違・歌の出入りにより系統を異にするようになった。まず、前半部屏風歌の歌序に乱れが生じたことにより、西本願寺本・資経本・承空本・御所本の共通祖本X本が、歌仙家集本系統・素寂本系統と分かれた。この時点で、X本は、西本願寺本が欠いている歌仙家集本に相当する巻四の歌166首を有していると考える。その後、西本願寺本系統が歌仙家集本に相当する巻四の歌を欠き、さらに、資経本系統が、前半部屏風歌の次に位置する恋部を巻末の巻七に配置したことによって、X本より西本願寺本系統と資経本系統が分かれたと見ることが出来よう。

そこで、本稿では、資経本が現存する巻六・巻七を対象に、先に示した『貫之集』第一類本主要伝本系統図におけるX本の本文推測を試みる。歌仙家集本、西本願寺本、資経本の細かな本文異同に基づき、西本願寺本系統と資経本系統（承空本・御所本を含む）の共通祖本であるX本の本文には、いかなる意義を見出すことが出来るのかを検証する。

西本願寺本・資経本ともに一致する例①[5]

西本願寺本・資経本の共通祖本であるX本の本文推測において、共通の祖本を持つ西本願寺本・資経本の本文が一致するものが、まずはその条件を満たしていると言えよう。よって初め

に、西本願寺本・資経本ともに本文が一致する例を挙げる。

あふことのあまひこにしてそらならは人めもわれもよきすそあらまし（五五八）

①歌「やまひこ」西「あまひこ」

②歌「よそならは」西「そらならは」

③歌「よかすそあらまし」西「よきすそあらまし」

傍線部①「あまひこ」は、西本願寺本と一致し、歌仙家集本「やまひこ」と対立している。さらに、傍線部②「そらならは」も西本願寺本と一致し、歌仙家集本「よそならは」と対立する。傍線部③「よきすそあらまし」においても、西本願寺本と一致し、歌仙家集本「よかすそあらまし」とは対立している。従って、この例においてのX本の本文は、資経本と西本願寺本が一致するもの、傍線部①は「あまひこ」、傍線部②は「そらならは」、傍線部③は「よきすそあらまし」であると考えられよう。

わかこひはしらぬやまちにあらなくに なとかこゝろのまとひけぬへき（五六二）

①歌「あらねとも」西「あらなくに」

②歌「まとふ心そわひしかりける」西「なとかこゝろのまとひけぬへき」

傍線部①「あらなくに」は、西本願寺本と一致し、歌仙家集本「あらねとも」と対立する。傍線部②「なとかこゝろのまとひけぬへき」も同様に、西本願寺本と一致し、歌仙家集本「まとふ心そわひしかりける」と対立する。よって、X本の本文は資経本・西本願寺本が一致する、傍線部①「あらなくに」、傍線部②「なとかこゝろのまとひけぬへき」と推測出来よう。

さけはまつむものとおもひしをくれなゐの□みたのかはのいろにさりける（六一二）

①歌「さけはちる」西「さけはつむ」

②歌「物と思ひし」西「ものとおもひしを」

※「□」は、資経本の虫損、承空本によると「な」となる。

傍線部①「さけはつむ」は、西本願寺本と一致し、歌仙家集本「さけはちる」と対立する。さらに傍線部②「ものとおもひしを」も同様に、西本願寺本と一致し、歌仙家集本「物と思ひし」

と対立する。従って、X本の本文は傍線部①では「さけはつむ」、傍線部②では「ものとおもひしを」であったと言えよう。

もろまさの侍従のよませ給へる
とをくゆくきみをゝしむと人もみなほとゝきすさへなきぬへらなり（七二〇）
歌「君を思ふに」西「きみをゝしむと」

傍線部「きみをゝしむと」は、西本願寺本と一致し、歌仙家集本「君を思ふに」と対立している。よって、X本の本文は、資経本・西本願寺本の「きみをゝしむと」であったと推測出来よう。

とよみて土左のくにゝあるあひたにをくられたる返事に
ふちころもかさなるおもひおもひやるこゝろはけふもやすまさりけり（七六〇）
歌「をとらさりけり」西「やすまさりけり」

傍線部「やすまさりけり」は、西本願寺本と一致し、歌仙家集本「をとらさりけり」と対立する。この例においても、X本は資経本・西本願寺本の「やすまさりけり」であったと考えられよう。

ここに挙げた五例は、いずれも西本願寺本・資経本の本文が一致し、歌仙家集本とは対立するものである。本文批判的に見て、共通の祖本を有している西本願寺本・資経本の本文が一致し、系統の異なる歌仙家集本が対立するのは至極当然のことであると言えよう。よってこの七例は、西本願寺本と資経本の共通祖本X本の本文そのもの、つまり、X本の姿が構築出来ているものと考えて良いのではなかろうか。同様の例をもう少し見ていく。

みつねかもとより
くさも木もけふはかれゆくあきかせにさきのみまさるものおもひのはな（八二三）
歌「ふけはかれぬる」西「けふはかれゆく」

傍線部「けふはかれゆく」は、西本願寺本と一致し、歌仙家集本「ふけはかれぬる」と対立している。従って、X本の本文は資経本・西本願寺本の「けふはかれゆく」であったと推測出来

よう。

女

花ならてうつろふものはしかすかにあたなる人のこゝろとそきく（八六四）

①歌「花なる物は」西「うつろふものは」

②歌「心なりけり」西「こゝろとそきく」

傍線部①「うつろふものは」は、西本願寺本と一致し、歌仙家集本「花なる物は」と対立する。さらに傍線部②「こゝろとそきく」も同様に、西本願寺本と一致し、歌仙家集本「心なりけり」と対立する。この例においても資経本・西本願寺本が一致する、傍線部①では「うつろふものは」、傍線部②では「こゝろとそきく」がX本の本文となろう。

西本願寺本・資経本ともに一致する例②

続けて、西本願寺本と資経本の本文が一致する例を見ていく。先ほどの七例とは異なり、系統の異なる歌仙家集本も一致する例を挙げる。

よの中はかくこそ有けれふくかせのめにみぬひともこひしかりけり（五三五）

歌　世中はかくこそ有けれ吹風のめに見ぬ人も恋しかりけり

西　よのなかはかくこそありけれ吹風のめにみぬ人も恋しかりけり

きみこふるなみたしなくはからころもむねのあたりは色もえなまし（五六三）

歌　君こふる涙しなくはから衣むねのあたりは色もえなまし

西　君こふるなみたしなくはから衣むねのあたりはいろもえな猿

あふ事を月日にそへてまつときは今日ゆくすゑになりねとそおもふ（五六四）

歌　逢ことを月日にそへて待時はけふゆくすゑになりねとそ思

西　あふことを月日にそへてまつときはけふゆくすゑになりねとそおもふ

なみたにそぬれつゝしほるよの人のつらきこゝろはそてのしつくか（五七〇）

歌　涙にそぬれつゝしほるよの人のつらき心は袖のしつくか
西　なみたにそぬれつゝしほるよの人のつらきこゝろはそてのしつくか

あきのゝにみたれてさける花の色のちくさにものをおもふころかな（五九二）

歌　秋の野にみたれてさける花の色のちくさに物を思ふ比かな
西　秋のゝにみたれてさける花のいろの千くさにものをおもふころかな

おほそらは雲らさりけりかみな月しくれこゝちはわれのみそする（五九五）

歌　大空はくもらさりけりかみな月しくれ心ちは我のみそする
西　おほそらはくもらさりけり神な月しくれ心地は我のみそする

このころはさみたれちかみほとゝきすおもひみたれてなかぬひそなき（六四四）

歌　此比はさみたれちかみ郭公おもひみたれてなかぬ日そなき
西　このころはさみたれちかみほとゝきすおもひみてれてなかぬ日そなき

ここに挙げた七例は、西本願寺本・資経本・歌仙家集本ともに、本文が一致するものである。本文批判的にみると、X本という共通の祖本を持つ西本願寺本と資経本の本文が一致、さらに系統の異なる歌仙家集本も一致しているものである。よってこの七例においても、西本願寺本と資経本の共通祖本X本の本文そのもの、つまり、X本の姿が構築出来ているものとなろう。

西本願寺本と資経本が対立する例①

次に、X本という共通祖本を持つ西本願寺本と資経本の本文が対立した場合の例を見ていく。X本の本文を推測するにあたり、そのX本を共通祖本とする西本願寺本と資経本の本文が対立した場合、本文批判的には、系統の異なる歌仙家集本と一致する西本願寺本もしくは資経本がX本の本文である、と考えてよいのではなかろうか。これを踏まえて、まず、西本願寺本と歌仙家集本が一致する例を挙げる。

もゆれともしるしたになきふしのねにおもふことをは[1]たとへならなん[2]（五五二）

①歌「思ふ中をは」西「おもふなかをは」

②歌「さらなん」西「さら南」

傍線部①「おもふことをは」は、西本願寺本「おもふなかをは」と対立する。さらに西本願寺本は、歌仙家集本「思ふ中をは」と一致。従って、西本願寺本と資経本の共通祖本X本の本文は「おもふなかをは」であると推測出来よう。傍線部②「ならなん」は、西本願寺本「さら南」と対立し、西本願寺本は、歌仙家集本「さらなん」と一致する。傍線部①と同様、X本の本文は「さらなん」であると言えよう。

あふ事[1]もなくて月日はつらけれ[2]とこゝろはかりはあけくれもせす（五七二）

①歌「逢ことの」西「あふことの」

②歌「へにけれと」西「へにけれと」

傍線部①「あふ事も」は、西本願寺本「あふことの」と対立する。この例においても、西本願寺本は歌仙家集本「逢ことの」と一致している。傍線部②「つらけれと」も同様に、資経本は西本願寺本「へにけれと」と対立し、さらに西本願寺本は歌仙家集本「へにけれと」と一致する。よってX本の本文は、傍線部①においては「あふことの」、傍線部②においては「へにけれと」であると推測出来よう。

よみ人しらす

□□[A]とてかわかこひさらんしなのなるあさまのやまは□□[B]りたゆとも（六五六）

歌・西「ちはやふる」

※□□[A]は資経本の虫損、承空本で補うと「いつ」となる。

※□□[B]は、資経本・承空本ともに虫損・汚れ、御所本で補うと「けふ」となる。

傍線部「しなのなる」は、西本願寺本「ちはやふる」と対立する。西本願寺本は、歌仙家集本「ちはやふる」と一致している。ここでも同様に、X本の本文は西本願寺本・歌仙家集本の「ちはやふる」であると推測出来よう。

四日になりておなし人のもとにやる
あはぬまにむめもさくらもすきにしをそのはなをさへやり
つへきかな（八四二）
歌「卯花」西「うのはな」

傍線部「そのはな」は、西本願寺本「うのはな」と対立し、西本願寺本は、歌仙家集本「卯花」と一致している。従って、西本願寺本「うのはな」・歌仙家集本「卯花」がX本の本文であると考えられよう。

人の身にあきやたつ□んことのはのうすくなり〳〵うつろ
ひにけり（五八七）
歌・西「うすくこくなり」
※□は資経本の虫損、承空本で補うと「ら」となる。

傍線部「うすくなり〳〵」は、西本願寺本「うすくこくなり」と対立し、西本願寺本は、歌仙家集本「うすくこくなり」と一致。この例においても、西本願寺本・歌仙家集本の「うすくこくなり」がX本の本文となろう。

ここに挙げた五例は、いずれも西本願寺本と資経本の本文が対立し、さらに西本願寺本と歌仙家集本が一致するものである。先にも述べたが、西本願寺本と資経本が対立した場合は、本文批判的には、西本願寺本・資経本両系統と異なる歌仙家集本と一致する本文がX本であると推測出来る。同様の例をもう少し見ていく。

屏風のゑにかけるはなを
さきそめしときよりのちはうちはへてよははるなれやいろ
のかはらぬ（七七〇）
歌・西「つねなる」

傍線部「かはらぬ」は、西本願寺本「つねなる」と対立し、西本願寺本は、歌仙家集本「つねなる」と一致する。X本の本文は、西本願寺本・歌仙家集本の「つねなる」であると推測出来よう。

みつねかへし
きみなくてふるのやしろのはるかすみいたつらにこそたち
わたるらめ（七四九）

歌「山への」西「やまへの」

傍線部「やしろの」は、これまでの例と同様、西本願寺本「やまへの」と対立し、西本願寺本は、歌仙家集本「山への」と一致する。よって、X本の本文は「やまへの」であると言えよう。

西本願寺本と資経本が対立する例②

続けて、西本願寺本と資経本が対立する例を見ていく。先程の七例とは異なり、資経本と歌仙家集本が一致する例を挙げる。

くれな井のふりてつゝなくなみたにはたもとのみこそいろまさりけれ（五四三）

歌「涙には」西「なみたかわ」

傍線部「なみたには」は、西本願寺本「なみたかわ」と対立し、歌仙家集本「涙には」と一致する。従って、X本の本文は、資経本「なみたには」・歌仙家集本「涙には」であると言えよう。

しらたまとみえしなみたも年ふれはからくれな井になりぬへらなり（五四九）

歌「成ぬへらなり（うつろひにけり）」西「うつろひにけり」

傍線部「なりぬへらなり」は、西本願寺本「うつろひにけり」と対立する。歌仙家集本は「成ぬへらなり」、異文注記「うつろひにけり」となっている。歌仙家集本の異文注記は、西本願寺本と一致している。恐らく歌仙家集本は、西本願寺本系統の本文で書入れを施したと窺えるのではなかろうか。その歌仙家集本の異文注記を除けば、資経本は歌仙家集本と一致している。よって、X本の本文は「なりぬへらなり」であると言えよう。

わひわたる我身はつゆをおなしくはきみかゝきねの草にきえなん（六二四）

歌「きみかゝきねの」西「きみかあたりの」

傍線部「きみかゝきねの」は、西本願寺本「きみかあたりの」と対立し、歌仙家集本「きみかゝきねの」と一致する。従って、資経本・歌仙家集本の「きみかゝきねの」がX本の本文となろう。

ふちころもはつるゝいとは君こふるなみたのたまのをとそなりける（七六四）

歌「君こふる」西「わひゝとの」

傍線部「君こふる」は、西本願寺本「わひゝとの」と対立し、歌仙家集本「君こふる」と一致している。やはりこの例においても、X本の本文は、資経本・歌仙家集本の「君こふる」であると推測出来よう。

とある返事

おきつなみたかしの①はまのはまゝつのなにこそ②君をまちわ③たりつれ（七七四）

①歌「たかしの」西「たかせの」

②歌「名にこそ」西「ねにこそ」

③歌「待わたりつれ」西「こひわたりつれ」

傍線部①「たかしの」は、西本願寺本「たかせの」と対立し、歌仙家集本「たかしの」と一致している。傍線部②も同様に、資経本「なにこそ」は、西本願寺本「ねにこそ」と対立し、歌仙家集本「名にこそ」と一致する。さらに傍線部③「まちわたりつれ」も、西本願寺本「こひわたりつれ」と対立、歌仙家集本「待わたりつれ」と一致している。よって、X本の本文は、資経本と歌仙家集本が一致するもの、傍線部①は「たかしの」、傍線部②は「なにこそ」、傍線部③は「まちわたりつれ」であると推測出来よう。

ここに挙げた五例は、いずれも西本願寺本と資経本の本文が対立し、さらに資経本と歌仙家集本が一致するものである。先にも述べたが、今一度確認すると、西本願寺本と資経本が対立した場合は、本文批判的には、西本願寺本・資経本両系統と異なる歌仙家集本と一致する本文が、X本であると推測できる。同様の例をもう少し見ていく。

源宗于の朝臣のもとより

きみひとりとはぬからにやわかや□のみちもつゆけくなりぬへらなり（八〇二）

歌「とはぬからにや」西「きとはからに」

※□は資経本の虫損、承空本で補うと「と」となる。

傍線部「とはぬからにや」は、西本願寺本「きとはからに」と

対立し、歌仙家集本「とはぬからにや」と一致している。よって、X本の本文は資経本・歌仙家集本の「とはぬからにや」であると推測出来よう。

返し

はるあきはすくすものからこゝろには花ももみちもなくこそありけれ（八六七）

歌「なくこそ有けれ」西「にほひなくこそ」

傍線部「なくこそありけれ」は、西本願寺本「にほひなくこそ」と対立し、歌仙家集本「なくこそ有けれ」と一致している。従って、この例においてもX本の本文は資経本・歌仙家集本の「なくこそありけれ」であると推測出来よう。

おわりに

以上、西本願寺本と資経本の共通祖本であるX本の本文推測を試みた。まず、共通の祖本を有する西本願寺本と資経本の本文が一致する例を挙げた。系統の異なる歌仙家集本が対立する例、さらに系統の異なる歌仙家集本も一致する例を挙げてX本を推測した。

次に、西本願寺本と資経本の本文が対立した場合においては、歌仙家集本と一致する西本願寺本もしくは資経本から例を挙げ、X本の本文を推測した。

初めに示した伝本系統図は、直接の書承関係を示したものではない故、本稿で論じたX本の本文推測は、あくまでも憶測の域を出ない。しかし、X本の本文推測が可能になったことにより、今後はX本・歌仙家集本・素寂本との比較検討も可能となろう。つまり、『貫之集』第一類本の共通祖本へ通ずる本文に、わずかではあるが迫ることが出来るのではなかろうか。

また、本稿では、資経本が現存する巻六（別・かなしひ）・巻七（雑・恋）を対象とした為、前半部屏風歌・賀部においてのX本の本文推測は今後の課題としたい。なおその際、資経本は巻六・巻七のみが伝わる零本である為、その転写本たる承空本を援用することになろう。

〔注〕

（1）従来は、承空本・御所本の二本に直接の書承関係が認められていた（冷泉家時雨亭叢書第六十九巻『承空本私家集上』（朝日新聞社 平成十四年）解題ご担当の田中登氏の御論

による。その後、拙稿「資経本『貫之集』の位置付け――承空本との関わりにおいて――」（関西大学『国文学』平成二十八年）において、資経本・承空本・御所本の三本に直接の書承関係が認められることを明らかにした。

（2）表は、前半部分（巻一～巻四）と後半部分（巻五～巻九）に分けた。歌番号は、各諸本の通し番号となる。表に示した歌序について、内実は、一首あるいは数首が前後したり、また巻を違えて離れた箇所に移動したりしている場合もある。さらに、前半部分（巻一～巻四）に関しては、資経本が現存していない為、その転写本である承空本を援用する。

（3）表は、歌仙家集本を基準として歌序を並べかえたものである故、承空本巻五553番歌～559番歌、560番歌～577番歌の箇所については、資経本は現存しない箇所となる。

（4）田中登氏「素寂本貫之集の意義」（『関西大学文学論集』第五十四巻 第一号 平成十六年）の図を基に作成したもの。なお、資経本・承空本・御所本以外については、直接の書承関係を示したものではない。

（5）『貫之集』本文は資経本で示し、歌番号は歌仙家集本を底本とする『新編私家集大成ＣＤ－ＲＯＭ版』（エムワイ企画 平成二十年）による。以下、和歌の引用はすべて同様の措置をとる。諸本の略号は、歌→歌仙家集本、西→西本願寺本、資→資経本。なお、素寂本は前半部（巻一～巻四）しか現存していない為、本文異同では取り上げない。

〈付記〉

本稿は、平成二十八年七月九日開催の和歌文学会関西例会での口頭発表に基づくものである。発表の際、種々御教示いただいた方々に心より御礼申し上げる。

（きたい　ゆみこ／本学非常勤講師）